



「特別の教科 道徳」の 開始に当たって

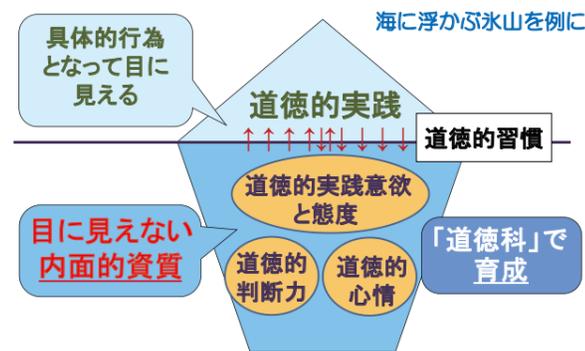
2019. 6

明星大学・
青山学院大学
大原 龍一

2018年度（中学校においては2019年度）から、「特別の教科 道徳」が完全実施となっています。各学校におかれましても、順調にスタートしているのではないのでしょうか。特に、道徳教育をけん引しておられるリーダーとなる先生方におかれましては、その進行管理にご尽力いただいていることと拝察します。

そこで、この時期にさらなる「道徳科」授業の充実に向けて少しでもお役に立てればと思い、「これだけは！」ということをもとめてみました。このリーフレットを現場で活用していただければ幸いです。

I 道徳科では、「内面的資質」である「道徳性」を養う



II 道徳科では、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」を育てる

<p>道徳的実践意欲と態度 道徳的心情や道徳的判断力によって価値あるとされた行動をとろうとする傾向性 道徳的実践意欲: 道徳的価値を実現しようとする意志の働き 道徳的態度: 具体的な道徳的行為への身構え</p>	
<p>道徳的判断力 様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力</p>	<p>道徳的心情 人間としてのよりよい生き方や善を志向する感情</p>

III 道徳性を養うために行う道徳科における学習

(1) 道徳的諸価値について理解する。

- 価値理解：内容項目が人間としてよりよく生きるうえで大切であることを理解している。
- 人間理解：大切であっても、なかなか実現できない人間の弱さを理解している。
- 他者理解：道徳的なものの見方、考え方は一つではなく、多様であることを理解している。

(2) 自己を見つめる。

- 道徳的価値を自分のこととして考えたり感じたりしている。

(3) 物事を多面的・多角的に考える。→ 道徳的な見方、考え方が多様にできる。

- 多面的：違う側面から見ると、別の見方、考え方をすることができる。
- 多角的：関連する道徳的価値（内容項目）に広がりをもたせて考えたり思ったりする。他の道徳的価値（内容項目）とのつながりなどを理解する。

(4) 自己の生き方についての考えを深める。

- 今後の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができる。

IV 「特別の教科 道徳」の一般的な学習指導案（高学年教材「友の肖像画」を例として）

第5学年 道徳科学習指導案

日時、学校名、学年・組、指導者[◎] 等

1 主題名

- 本時の授業テーマ。→ 1時間の授業（学習）について端的な言葉で言い表したもの。子どもにも分かる、理解できる、考えることのできる「言葉」で表現する。
- 時に、「導入」や「展開後段」で直接主題名について問いかけるなど、発問にも活用できるもの。

「真の友情」 B 友情、信頼 （他に、「信じ合う友」「友との信頼」「友情を深める」など）

- ★ 主題名の後ろに、内容項目の柱（A～D）及び内容項目を「端的に表した言葉」を記しておく。
- ★ 主題名を板書する場合もあれば、しない場合もある。授業者の考えに任せる。

2 ねらいと教材

(1) ねらい

- 一般的に、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の「内容項目の指導の観点」の一覧表から学年毎の「指導の要点」を記載する。

友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。

- ★ 本内容項目は「B 友情、信頼」に関わるものであり「異性に対するもの」も含まれているので同時に併記した。「本時のねらい」では特にその部分については言及しない。

(2) 教材

- いわゆる教材名。
出典の明記を忘れない。

「友の肖像画」（小学校 道徳の指導資料とその利用3 文部省資料）

- ★ 教材によっては、同一名の教材でも出典によって記載に相違が見られる（「友のしょうぞう画」）。また、挿絵やそれを活用した場面絵（板書）についても著作に関わる許諾への配慮が必要。

3 主題設定の理由

- 下記(1)～(3)の順は問わない。学習指導要領解説や教科書の指導書などを参考にしっかり自分で考え、分析、考察して記す。その作業を通して教師の「指導観」を明確にしたい。

(1) ねらいとする内容項目（価値）について〈ねらいや指導内容についての教師の捉え方〉

- 道徳の内容項目（ねらいとする道徳的価値）を、このように捉え、このように考え、このように指導していく、という自分の見識をしっかりと述べる。その際、各学年（低・中・高別）の内容をよく吟味する。いわゆる、授業者自身が内容項目を「哲学」する所（見識：自分なりの捉え、考え）。また、「ねらいとする道徳的価値」と表記する指導案もある。

(2) 児童について〈ねらいや指導内容に関連する児童のこれまでの学習状況や実態と教師の願い〉

- 一般的な児童の実態ではなく、ねらいとする内容項目に即した実態を記す。日頃の観察、日記や作文、アンケート調査等各種情報を参考とする。このようにして目指す児童像に近づけたいという教師の思いや願いを記す。ねらいに対する児童の体験や経験などにも教師の知る範囲で触れたい。

(3) 教材について〈使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法など〉

- なぜこの教材を選んだのか、どんな意図でどのように提示するのか、どこを中心として考えさせるのか、また、それをどのような方法で考えさせるのか等を記述する。また、同じ内容項目を複数回取り扱う場合などはそのことにも触れておきたい。

年間指導計画における主題構成の背景などを再確認するとともに、①ねらいや指導内容についての教師の捉え方、②それに関連する児童のこれまでの学習状況や実態と教師の願い、③使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法などを記述する。

記述に当たっては、児童の肯定的な面やそれを更に伸ばしていこうとする観点からの積極的な捉え方を心掛けるようにする。また、抽象的な捉え方をするのではなく、児童の学習場面を予想したり、発達の段階や指導の流れを踏まえたりしながら、より具体的に積極的な教材の生かし方を記述するようにする。(「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」P.80 より 下線部は、大原)

(1) ねらいとする内容項目(価値)について

人間関係を結び付け、社会生活を成長させる基本は「信頼」である。友達同士が互いに助け合い、信じ合うことは、友人関係をさらによりよいものにする基盤と考える。そのような関係を築くには、相手の立場に立ち、……(略)

(2) 児童について

本学級は、友達を大切に思っている児童が多い。また、高学年になり仲間意識を強くもつようになってきた児童が多い。5月の運動会では、友達と協力してソーラン節に取り組んだ。休み時間には、教室で曲を流し、……(略)

(3) 教材について

(略)……この肖像画の前に立った時の、正一への不信感をもってしまったことへの和也の自責の念を考えさせたい。帰りの電車の中で目をつぶった和也に共感させ、正一への思いを考えさせることで、真の友情の素晴らしさを感じとらせたい。

4 学習指導過程

(1) 本時のねらい

- この教材で学習するこの時間ならではのねらいを設定する(その意味で「2 ねらいと教材」とは異なる)。本時でしか通用しないねらいなので、以下3つの部分から成り立つよう作成する。
 - ★教材に関わる部分(教材の登場人物等の心的状況や変化等を自分事として受け止めさせる)。
 - ★各学年の内容項目に即した学習部分(「指導の要点」の一部または全部を引用するが多い)。
 - ★道徳性の諸様相(道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度)で文末を締めくくる。

正一との真の友情を確かめた和也の気持ちの変化を自分のこととして受け止め(教材)、互いに信頼し合い、友情を深めていこうとする(内容項目)道徳的心情を養う(諸様相)。

(2) 学習指導過程 ※いわゆる展開の概要である。決まった形はないが、一般的な例を示す。

学習活動	○教師の発問や働きかけ	・予想される児童の反応	□指導上の留意点
導入部分	●導入の役割	①ねらいとする内容項目への導入 ②教材への導入 ③上記①②をミックスした導入 ④雰囲気高める導入	□(留意点として左記①～④を記入) □導入発問がある場合は、その発問をする意図を述べる。
1「親友」について考えることや登場人物について知る。	○今日は、「親友」について一緒に考えていきましょう。 ○教材の登場人物を紹介する。		・ねらいを明確にする。 ・主人公の焦点化を図り、教材への導入とする。

〈他の方法について〉

- 登場人物を紹介したり場面や時代背景等を紹介したりする方法、教材のあらすじを途中まで紹介する等(②)。
- 今月や今週の歌を歌って授業に入る方法等(④)。

展開部分(前段)

主たる教材に基づいて、ねらいとする「内容項目」について考える。

●教材提示

- ・「道徳授業の成否は教材提示で決まる」ほど重要。
- ・教材提示の工夫により児童を登場人物に自我関与させることが肝要。
- ★「間」と「余韻」を大切にした教師の語り。
- ★1回の「語り」で教師は勝負する。
- ★いったんはしまわせても、教材文や教科書はいつでも見てよいこととしたい。

●「発問」について

- ①(「教材分析表」の作成が前提となるが)本時のねらいを達成するために、一番ふさわしい場面から「中心発問」と「予想される反応」を設定する。
- ②中心発問に至るまでの「基本発問」と「予想される反応」を設定する(2～3問)。中心発問の後に基本発問が来る場合もある。
- ③「予想される児童の反応」は、思いついたままランダムに記すのではなく、道徳性の発達等の順序性に従うなど整理した状態で記述したい。
- ④期待したい「予想される反応」を先に考え、それが自然と出てくる発問を考える方法もある。

○「ぼく、きっと、手紙書くよ」と約束する和也は、どんな気持ちだったのだろう。基本発問(予想される反応)

○なんとなく手紙を書かなくなった和也の「思い」を考えよう。基本発問(予想される反応)

○あふれる涙で版画がかすんでしまった時の和也にはどんな気持ちや思いがあったのだろう。基本発問
・正一君も仕方なかったんだ。
・こんなぼくのことを考えてくれていたんだ。
・ごめんね、疑ったりして。
・自分勝手に考えていて、友達に対して悪かったな。

□教材提示の方法を記述。

- ・教師の範読・紙芝居
- ・パワーポイントによる電子紙芝居
- ・一人ないし複数教員による劇化・パネルシアター
- ・BGMの活用等

□何を、どのように「考えさせる」のか、そのことを明確に記す。

□「気持ち」を聞いたら「具体的にどんな気持ち」に共感させたり、考えさせたりするのか記す。「思い」や「考え」についても同様である。
□指導上の「手立て」についても記しておきたい。

- ・遠く離れていてもいつまでも仲良しでいようと思う「ぼく」と正一の気持ちに共感させる。
- ・次第に正一への思いが遠ざかっていく「ぼく」の心の内を考えさせる。
- ・正一の和也に対する思いの深さに気付くとともに正一を疑ってしまい、後悔する気持ちからさらに友情を深めていこうとする和也の気持ちに共感させる。

- (電車の中でじっと目をつむっている) 和也はどんな気持ちだったのでしょうか。 **中心発問**
 - ・帰ったら手紙を書こう。病気に負けないでね。
 - ・離れていてもいつまでも友達だよ。
 - ・正一君のことを信じていつまでも仲よくしよう。

⑤ してはいけない発問例。

- ・「もしあなたが〇〇だったらどうしますか。」といった仮定の発問。〈無理になり切らせようとしない〉
例：もしあなたが手品師だったら大劇場に行きますか？ それとも男の子の所へ行きますか？
- ・「なぜ」「どうして」など理由を聞く発問。〈読み取り発問〉
例：なぜ手品師は大劇場の出演を断って男の子の所へ行ったのでしょうか。
※ただし、判断理由等を聞く場合は可である。
- ・教材に描かれている場面状況や登場人物の言動等確認が中心となる問いかけ (教材の後追い)。
例：誰が出てきましたか、何をしましたか、等。

● 「話し合い」活動 (「議論する道徳」)

- ★話し合いの基本は、「聴き合い」の指導の徹底から。
- ★教師の「待つ、聴く、受けとめる」姿勢で子どもの発言を促したい。
- ★話し合いを通して、物事を多面的・多角的に見る。
- ①ペアによる対話、グループによる議論 (会話)。
- ②一問一答の授業も立派な話し合い活動である (教師のコーディネート力が求められる)。

● 「話し合い」で期待する子どもの変容

- ・自分の考えの曖昧さに気付く
- ・自分の考えがはっきりする
- ・自分の考えと他の人の考えの違いに気付く
- ・自分の考えが強まる
- ・自分の考えの変化に気付く

● 「動作化」や「役割演技」など表現活動の工夫

- ★動作化と役割演技を混同しないこと。
- 動作化**：動きや言葉を模倣して理解を深める。
- 役割演技**：特定の役割を与えて**即興的に演技して**普段気付かない心情や心理を掘り起こす。
- 体験的活動**：追体験や道徳的行為などをして心の中の在り様を考えたり、よさを味わったりする。

◎行為の仕方そのものを指導したりする時間であってはならない (道徳科の特質の理解)。

- ・これまでの正一とのことが浮かんできて、一度は疑ってしまったけれどこれからもずっと親友でいようとする「ぼく」の気持ちを自分のこととして考える。

□教材提示で十分自我関与していればこんな発問は不要。

□理由を本文から探し始める。読み取り、読解授業になる。子どもは、その理由を教材文から見つけようとする。

□教師が説明、補足すれば十分である。時間をかけるのがもったいない。

□ペアやグループでの話し合いを取り入れる場合、その必然性を述べる。

□「伝え合い」なのか「話し合い」なのかを明確にする。

□ディベートは道徳科の授業になじまない。

(体験的活動)の導入

□演技を行う前に必ずウォーミングアップを取り入れる。また、中断法により途中で話し合う場面を設けること。役割を交代すること。児童の演技力を問うてはならない。演劇指導ではない。

展開部分 (後段)

自己の生き方についての考えを深める。

- 教材から離れて、自分自身のことを語らせる。発問→発表や話し合い、書く活動など。

〈「展開後段の発問 (価値の主體的自覚を図る)」とは……〉

児童が学びとった価値を、現実の生活へ広げたり、今までの経験を生かして深めたり他の人の考えと比べたりしながら、ねらいをより確かなかたちで自覚していくための発問。

- これからもっと友情を深め、親友を大切にしていけるには、どんな気持ちや思いが大切でしょう。
 - ・親友の気持ちを理解し、相手を大切にしたい。
 - ・学び合って、助け合う。

- ・子ども達一人一人がこれまでの自分を振り返り、親友について考えられるように支援する。(ワークシート)

終末

教師の話を聞く

- 教師がまとめるのではなく、子ども達一人一人が各自の思いや考えをまとめることが大切。

- 教師の話を聞かせる。
 - ・離れていても、相手のことを思い、お互いに頑張れる友達について話す。

□説話、家族からの手紙、スライドショー、ゲストティーチャー 等。

- ・余韻をもって終わる。(BGMの活用もよい)

5 評価 ※評価については、以下のように2つの観点から記述することが望ましい。

(1)指導者の立場からの評価 (教師の指導について評価し、次なる指導に活かす)

- ・授業者自身の授業方法や学習過程について評価する (・発問 ・板書 ・話し合い ・説話 等)。

(2)学習者の立場からの評価 (子ども達一人一人の道徳的な見方・考え方がどのように伸びたか)

- ・ねらいに即して、子どもたちの道徳性の高まりについて評価する。道徳性の諸様相 (道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度) から。

6 板書計画 ※板書について留意したい視点。

- (1)目に見えない「心の在り様」を見える化する。
- (2)学習指導過程と板書計画は一体のもの。
- (3)子どもに分かりやすい板書を。
- (4)学習活動に示唆やヒントを与える板書を。
- (5)「心の多様性を際立たせる」板書を。

